

# ハロルド・コーエンの創造プロセスの記号的解釈とその実践 —記号的自我〈Self-Other-Self〉モデルによる〈他者〉としての AI との内的対話—

山口 達典 (情報科学芸術大学院大学)

## 発表要旨：

本研究の目的は、作品制作に AI を使用した最初期の芸術家、ハロルド・コーエンの創造プロセスを記号的に解釈することである。さらに本研究は、そのプロセスが現代の AI 技術を用いた制作においても再現可能であると捉え、その実践としての絵画制作を報告する。

今日の AI 技術は、芸術分野においても様々な議論を投げかけている。その代表的な事例としてコーエンに言及する先行研究は多いが、そこでは主として彼の芸術制作 AI プログラム「AARON」の創造性に関する議論がなされてきた。しかし、コーエン自身の創造プロセスに対する議論は十分になされていない。人間と AI の相互作用による創造のプロセスに着目する co-creative (共創) 研究の意義が示されるなかで (Wingström et al, 2024)、その重要な事例としてのコーエンの創造プロセスを示すことは有益である。

そこで本研究が着目するのは、Sundararajan & Kim (2011) が提唱した記号的自我における〈Self-Other-Self〉モデルである。これは、C. S. パースと G. H. ミードの自我の理論を統合したワイリー (1999) の〈I-You-Me〉モデルを基礎とする、〈他者〉との「内的対話」により〈自我〉を変容させ新たに作り上げる「思考の仕方」を説明したものである。Sundararajan (2019) はこれをコーエンに適用し、AARON との内的対話が彼の創造的活動において重要であったと論じた。筆者は 2025 年の研究で、〈Self-Other-Self〉モデルが AARON 開発以降のコーエンの創造的活動の特徴を通時的に説明しうることを示し、一貫して〈他者〉との内的対話によって〈自我〉を変容させ続けていたことを論じた。

本研究は、この知見を二つの方向に展開する。第一に、このモデルをコーエンの創造プロセスの記号的解釈の枠組みへと拡張する。自らを変容させる思考を創造性の中心に位置付けるなど (Cohen, 1981)、このモデルは彼が「創造性」と呼ぶものと符合する。そこで本研究は、彼の発言などを根拠に、コーエンの創造プロセスはこのモデルにより記号的解釈が可能と捉える。第二に、このプロセスを再現した実践として、AI との内的対話を制作過程に設定した絵画シリーズ《EXPAND》を報告する。そこでは、再現表象的な描画を行う作者が、超現実的なイメージを描くなどの変化があった。この過程を報告することで、AI を使用する作品制作において、このモデルが創造プロセスにおいて有効であることを示唆する。

## 主要参考文献

- Cohen, H. (1981, November). On the modelling of creative behavior (Paper No. P-6681). The RAND Corporation.
- Sundararajan, L., & Kim, C. (2011). Beyond I-you-me: An empirically supported formulation of the triadic self. *The American Sociologist*, 42(2-3), 220-231.
- Sundararajan, L. (2019). Harold Cohen (1928-2016): The Last six years of a Creative Life. *Setu Bilingual Journal*, 4(3).
- Wingström, R., Hautala, J., & Lundman, R. (2024). Redefining creativity in the era of AI? Perspectives of computer scientists and new media artists. *Creativity Research Journal*, 36(2), 177-193.
- ワイリー, N. (1999). 自我の記号論 (船倉正憲, 訳). 法政大学出版社. (原著: 1994 年出版)